

---

# 月と向日葵はうたう。

水無月 十七

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

月と向日葵はうたう。

### 【Nコード】

N2638D

### 【作者名】

水無月 十七

### 【あらすじ】

「彼女には違う時間が流れている気がした」普通の少年、高瀬シヨウとミステリアスな“眠り姫”仲野リオのほのぼのとした物語。多分恋の話（になる予定）

## 青空

少女から少年は見えなかった。あまりにも先すぎて、輝きすぎて。

「え・・・・・・・・な、仲野！おっはよー！」

「・・・・・・・・おはよう。」

これが、俺　高瀬シヨウと仲野リオの初めての会話だった。

その日、俺は7時30分というあり得ない時間に学校へ来た。サッカーの自主練をするために。

俺は、サッカー部に入っている中学一年生。運動神経は悪くないけど、生まれつき不器用な俺は、小学校からやっていたわけでもないチーム球技では、すぐに落ちこぼれた。

運動部にしては優しい先輩と、俺の社交性がなければ、きっと嫌われていただろう。

でも、俺のプレーを見た先輩が苦笑いするのは、もう耐えられない！！

まだ学校に誰も来ていないこの時間なら、周りから「下手！」って言われる恐れがないから、心おきなく練習に励めると俺は思った。

（お調子者でも多少は傷つくんですよ？）なのに・・・

（なんでいるんだよー！？）

俺は、心の中でため息をついた。

ため息の原因は、自分の席から俺を静かに見つめている女子　仲野リオだった。

中学一年の二学期。

仲野は、こんな時期に我が一年C組にやってきた転校生だった。小柄で色白。色素が薄めな焦げ茶色の髪は、尻まで届くほど長かった。

彫りが深く、目つきがきつい顔立ちにはクラスの大半が少し引いた。んで、転校早々ついたあだ名が“眠り姫”。

仲野は、みんなに「よろしくの一言も言わず、指示された席に着くと、一時間目から爆睡。四時間目終了のチャイムで計ったように起き出すと、弁当を手にはふらりとどこかに消えてしまった。

それから後も、先生がいくら叫んでも起きなかった仲野は、ついに終学活まで寝ていた。でも、下校時刻になると幻のように消えていた。

クラスの派手な女子たちは、「キモい」だの「むかつく」だのいろいろ言ってるけど、思ったより長いまつげで縁取られた目とか、結構可愛いと俺は思うんだ。

こんな変わった転校生が来て、もう三週間になる。

先生たちはついに仲野を起こすことをあきらめた。今では、仲野の寝息がクラスのBGMになりつつある。

（まさか、こんな時間にいるなんて・・・）

「仲野、お前来るのはえーな。いつもこんな早くに来てるのか？」戸惑いながらも、精一杯のにこやかな笑顔で話しかけてみた。

「・・・」

「・・・シカト？マジですか？」

いやっ、くじけてはいけないぞ俺！

自分で自分に喝を入れると、どうにかして仲野とコンタクトをとろうとする。

この自主練を秘密にしてもらうために。

「な、仲野はさ、何でこんなに早くに来るんだ？」

ヤバイ。どもってしまった。しかもなんて答えにくい質問をするんだ・・・

きつと、仲野だつて引くに決まってる・・・

「なぜ、理由がある？」

・・・は？

何この声。

えっ！？もしかして？？もしかすると？

「なぜ理由が必要なのだ？」

まぎれもなく、この、よく響く少し低めの声は仲野のものだった。

（っーか・・・）

言葉遣いおかしくねえ？

『なぜ』とか『なのだ』とか・・・  
今どきふざけてても言わねーよな。

「答えられないのか？」

「うえ？」

ボーッとしていたせいか、変な声を出してしまった。

「ならいい。」

仲野は、無表情に言うと、俺に張り付いていた視線を手元に落とす。

その手には、今まで気付かなかったが本がにぎられている。でも、俺にそんなこと気にしている余裕はなかった。仲野にかんたかしてこの自主練を秘密にしてもらわなければ！

「仲野！！」

俺は勇気を振り絞って声を掛けた。仲野は、ゆっくりと顔を上げる。

「？」

「あ、あの、さっきはこっちから聞いたいて、シカトして悪かった。えつと・・・お前に頼みがあるんだ。」

「頼み？」

「えつと、その・・・俺が朝早く来ていることみんなには黙って欲しいんだ。」

仲野は、こっちが苦しくなるほど見つめてくる。

そのためか、俺はものすごく緊張していた。

まるで、裁判に来た犯罪者のように。

「別に構わない。」

仲野は厳かに告げた。

俺は、自分でもビックリするほど安堵していた。

「そつか！！ありがとな！」

しつかりとお礼を言う。（人間関係良好のための秘訣！）

「ただ・・・」

「え？」

「私はお前の名前を知らない。」

びびった・・・

仲野に真顔で声かけられると、何もしなくても緊張する。

「そういや、まだ言ってなかったもんな。俺、高瀬シヨウ。よろしくな！」

「ああ。」

仲野の素っ気ない態度はもう気にしないことにする。

でも、この変な言葉遣いの少女が俺はいたく気になった。

「なんでこんなに朝早く来ているの?」、「なんで授業中寝ているの?」、「どうしてそんな風に喋るの?」・・・聞きたいことは山積みだった。

でも、サッカーの練習に早く行かないと。これじゃあ本末転倒になっってしまう。

俺は、昨日習ったばかりの四字熟語を思い出しながら校庭へ向かった。

9月の半ば。

そろそろ高くなってきた空は、今日もキレイに青かった。

## 青空（後書き）

どうも。水無月<sup>ミナツキ</sup> 十七<sup>トナ</sup>と言います。

このような駄文にお付き合い下さり、本当にありがとうございます。  
少しでも、シヨウやり才達を愛でてくれたら幸せです。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2638d/>

---

月と向日葵はうたう。

2010年10月10日04時30分発行